ふくいの子どもたちと先生のための

GGKニュース2023

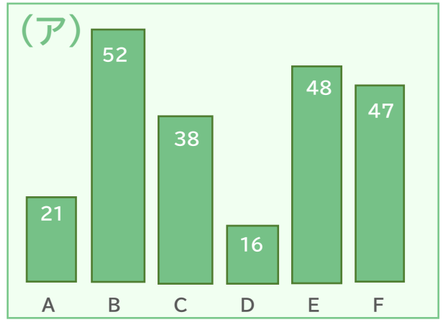
Gakko Gyomu Kaizen

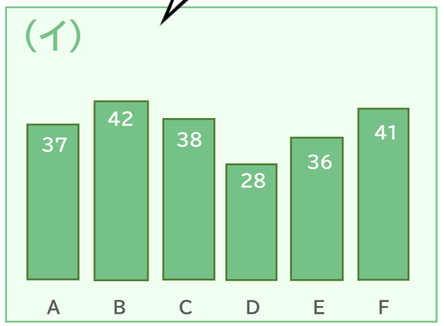
VOL.3
令和5年6月13日発行

発行：福井県教育庁
教職員課　学校業務改善グループ
kyosyoku@pref.fukui.lg.jp

＼様々な取組や心がけで、みなさんの時間外在校等時間は短くなってきました／

「平均数値は改善してきたかな…」 ちょっと待って！ その中身はどうですか？





左のグラフはどちらも1か月あたりの時間外在校等時間の教職員平均が37時間の学校の例です。

（ア）の学校で一番時間外在校等時間が短い先生が16時間であるのに対し、長い先生は52時間。その差は36時間。

一方で（イ）の学校では、一番短い先生でも28時間と（ア）の学校より長くなっていますが、長短の差は14時間です。

どちらも平均すると37時間

45時間以下割合　50%　　45時間以下割合　100%

学校規模や校種で多忙な時期が異なったり、割り当てられた校務分掌ごとの差、経験の差によってかかる時間に差が出ることもありますが、（ア）の学校ではこれが常態化していて業務負担の偏りがあるかもしれません。

では、長短の差が少ない学校にはどんな特徴があるのでしょうか。今回は、校務分掌や学年業務など、一人当たりの割り当てが増える傾向にある小規模の小学校にスポットを当ててみました。

知っていますか？こんなワード

ヘルシーコンフリクト

直訳すると、「健全な衝突」という意味で、「新しい取り組みやアイデアを生み出したり、変化の大きい社会情勢において課題を乗り越えていくには、健全な対立は必要だ」という考え方です。

誰しも組織の中で衝突は避けたいものですが、議論や検討の場において、言うべきことを言わなければならない場面というのは必ずあると思います。そのためには学校内やチームの中での**「心理的安全性」**が必要ですね。日ごろから心がけられることはあるでしょうか。

鯖江市　河和田小学校に伺いました！

【学校規模】 各学年1学級　全児童数約140名
【めざす教師像】 スローガン **“ ONE for ALL, ALL for ONE. ”**
【勤務実態データ】 令和5年4月　時間外在校等時間　平均：31時間50分
（県平均：40時間22分）
最短：22時間45分　最長：39時間32分（いずれも教諭）

キーワード：「関係性」と「未然防止」

VOL.1でもお伝えしましたが、学校業務改善は「楽するために削ぎ落す」ではなく、生まれたゆとりで子どもたちとの向き合い方を再考したり、より良い教育へ向かうなど、教職員のやりがいが高められるものであってほしいと思っています。

そこで、河和田小学校の様子を校長先生にお話しいただきました。

日ごろの関わりの大切さは児童も教職員も同じ

全体的に教職員の時間外在校等時間が短くなっている河和田小学校では、校務分掌や児童の対応等、ひとりで抱え込まないように助け合う意識が醸成されています。

その秘訣は、**日ごろの関係性**。児童生徒の変化に目を配るように、校長先生ご自身は全教職員に**「良いところ探し」の声掛け**を意識されているそうです。

日ごろからコミュニケーションをマメにとることは、管理職以外の方でもすぐに心掛けられそうですね。

緊急事態を未然に防ぐことは将来の業務負担の軽減

緊急事案が発生すると、普段の業務に加えて業務が増えることになり、忙しくなります。不測の事態やけがは付き物ですが、防げるトラブルも数多くあります。日常的に**「未然防止」**ができていれば、通常業務に集中することができます。

もしも、早く帰るために手を抜いてしまったら…むしろ後々にトラブルを招いて自ら仕事を増やしてしまうことになるかもしれません。

心理的安全性の高い組織と言えますね★

小さな変化にすぐ気づいてもらえる学校は、児童・保護者にとっても安心な環境ですね。

＝中学校区単位での横のつながり＝

小規模の小学校では、同じ学年の他の担任との連携や相談ができなかったり、児童にとっては6年間クラス替えがほとんどなく、人間関係の広がりも少ないことが特徴として挙げられます。

そこで、河和田小学校の属する「東陽中学校区」の小学校では、教職員の横のつながりでの相談（教材研究や学級経営、デジタル教材の活用等）の他、今後はオンラインを活用した授業の連携による児童同士の交流などにもつなげていくそうです。

＊編集後記＊

先生方に「平均」の話をするのは大変おこがましいですが、今回は敢えてグラフで見て捉える形にしてみました。時間外在校等時間に関するデータを提供する際、平均の平均（例えば、学校平均の県全体平均）を載せることがあります。VOL.2で取り上げた勤務実態調査の速報も同様です。組織全体としての数値の変化を見るのには有効ですが、働いているのは教職員という個人一人ひとり。GGKニュースは**「ふくいの子どもたちと先生のための」**媒体ということを忘れず、これからも精進いたします。

次号　VOL.4も
お楽しみに！